

特集 ● 中国水利史

中国社会と水利

中国における専制的統一支配とウィットフォーゲルの水の理論、水利共同体論、南北の地域差の問題、地域のエリート層・地方官僚・国家の水利における役割、さらに社会調査と水利史研究の関連および最近の日中両国の注目すべき研究について、研究者が語り合う。

森田 明

〈大阪市立大学
学名譽教授〉

× 藤田勝久

〈愛媛大学法
文学部教授〉

× 松田吉郎

〈兵庫教育
大学教授〉

司会

馬場 毅

〈愛知大学現代
中国学部教授〉

馬場 今日是中国水利史研究会研究大会が終わったばかりで大変お疲れのところ、私ども愛知大学現代中国学部の『中国21』の座談会のためにお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

予め座談会のテーマを先生方にご連絡していますが、最初のテーマは「水利史研究におけるウィットフォーゲルの影響」です。ウィットフォーゲルの灌漑農業と専制権力の理論は、ある程度戦後の水利史研究に影響を与えたかと思えます。これを戦後の水利史研究による実証

を経た上で、どのように評価すべきかということについて、まず議論していただきたいと思えます。それでは森田先生から発言をお願いいたします。

ウィットフォーゲルの

水利史研究への影響

森田 ウィットフォーゲルの「水の理論」が日本で取り上げられるようになったのは、彼の理論が「アジア社会の停滞性」の論拠になっているということでした。これに対して、傾向としては、明ら

かに批判的、あるいは否定的な方向で議論が取り上げられるようになったのが事の初めだと思えます。

この問題に対する実証的な研究としては、木村正雄先生の研究の一つのきっかけとして、例えば天野元之助先生、増淵龍夫先生、西嶋定生先生が論文を発表されています。

その経過はともかく、少々時期が飛びますが、最近になって、濱川栄さんの『中国古代の社会と黄河』（早稲田大学学術叢書1、二〇〇九年）という書物が出

版されました。この著作の冒頭に学説史の流れを簡単かつ的確に紹介されておりまして、これが非常に有益であろうかと思えます。

木村先生の著書『中国古代帝国の形成——特にその成立の基礎条件』不昧堂出版、一九六五年、新版は比較文化研究所より二〇〇三年出版)の中では、結局古代国家、つまり秦漢帝国をどう考えるかということが大きな問題であったと思います。

木村先生は、一定の強力な治水灌漑機構の存在を可能ならしめる権力の発生というものがあつたと認められているわけですが、他方では、最後のところで、華北と江南との相違というものはつきりと提示して、江南においては必ずしも当てはまらず例外であると言っています。つまり、むしろ中国史の発展を認める部分があるわけです。一方では東洋的な所謂「デイスボティズム」の存在を強調しながら、そうした二面性があるようですね。

ところがこれに対して、天野先生は、



..... 森田 明[Morita Akira]

華北においては天水農業が一般的だということをおっしゃっています。例えば、井戸水灌漑や小規模灌漑が華北で随分行われている。いずれにしてもそれは国家的事業とみなすものではないということで木村説に反対しています。増淵先生も木村先生の主張については、特に第一次農地というようなものの史料の根拠は非常に不明確であるとおっしゃっていますね。したがって、増淵先生の書評では、これは理論に埋没しているという言い方で批判しております。

それから西嶋先生の古代国家について

は、個別人身支配という言い方が有名です。木村先生の言う斉民政治というものと類似した内容だと思いますが、西嶋先生は個別人身支配という言葉を使いながらも、少なくとも治水灌漑については否定的であつて、天野先生のように全面的な人口灌漑の必要性というものを否定されているという状況であるかと思えます。

非常におおざっぱな紹介ですが、木村先生の諸説に対して一九五〇、六〇年代に反論が続いて、その後は結局木村先生自身も、反批判はなさいませんでした。したがって論争の発展がないまま、水の理論というのも立ち消えになったという流れだと思えます。

七〇年代以降になると別の方向から、原宗子先生が非常な活躍の結果、「塩類集積」というような言葉を使って、水の理論への全面的批判を土壌学的に行われたということが加わりました。これも比較的近近のことです。

それから最も新しいものとしては、先ほどの濱川さんが、藤田先生の秦代の水

利事業についての実証的研究が、いわば水の理論の日本における決定的崩壊を導いたということを指摘しています。これを以て、濱川さんは黄河治水あるいは京師漕運、灌漑水利の三つの機能において、それぞれ実証的に研究した結果、中国における古代の専制主義成立の基礎条件としての水の理論というのは崩壊したと、受け止めておられるようです。

以上が、大きく言えば、ごく最近までの水の理論に対する批判的な流れです。

中国における専制的統一支配と水の理論

問題はむしろこれからが少々やつかいです。というのは、濱川さんの説を読みなおしてみますと、学説上は消滅したとおっしゃっているんですが、学校教育やあるいは一般読者を対象とした啓蒙書の中では、今でも水の理論が定説のように説かれていることを指摘されております。それがいったいなぜかということに對して、問題を提起しておられるわけです。これは水のことをやっている我々に

とっては、非常に注目すべきで考えなければならぬ問題であると思います。なぜなら、濱川さんによれば、結局水の理論が果たした役割というのは、中国における統一的な権力機構というものの必然性を説明し得たのが、水の理論だけであるということをおっしゃっています。逆に言えば、水の理論以外に中国の専制的統一支配の必然性を証明し得た理論は他に何も無いというわけです。つまり、濱川さんによれば、それは秦漢帝国以降、いろいろな分裂が歴史上あるわけですが、しかしそうした分裂を含みながらも、固定的で確実的な専制支配ではなくて、非常に流動性を含みながらも、皇帝による中央集権的な中央専制国家を存続させ、あるいは今日までそのような存続をみてきたのはいったいなぜなのか。これが中国史研究の根元的な問題として残っているのではないかと述べられています。そこで、いったいどのように考えればよいかということについて、要するに水の理論に代わる中国社会の統一的志向を説明する学説の構築が必要であると

いうことです。

もちろんこれは水利史研究だけが担える問題ではありませんが、そもそも水という問題を通してウィットフォードルがそうした考え方を提示してきたものですから、水利史研究として、我々としても何らかのアプローチをせざるを得ないと思います。そうした課題が今我々に突きつけられているのだと思います。

そこから先の問題といえますと、これは私の個人的なことで、学問的に問題があると思うので、お二人の先生からアドバイスをいただきたいのですが、大きく言えば、マクロ的な面からの追究と、ミクロ的な面からの、両面のアプローチが必要ではないかと思っています。

言い換えると、それは国家体制、あるいは中国の専制的な権力体制、つまり上からの公権力のあり方の問題についてです。一方は地域社会、あるいは村落共同体、社会集団です。上からの権力がいったいどこまで地域社会を捉えているのか、あるいは下の地域社会が体制というものに對して、どのように対応し、どこ

まで受け入れ、どこから事実的な性格をもっているのか、そうした両面からのアプローチの方法があるかと思っています。

私などは地域社会、村落共同体といった視点から捉えていこうとしています。いわゆる水利組織、水利社会、水利共同体について研究するということであれば、当然それは実態としての地域社会の在り方に迫る必要があると思います。

「国家と地域」という言い方をしますと、いわゆる二元論にはまっているように見えますが、中国の歴史をずっと見てみると、基本的にはそういう考え方が、非常に強いインパクトをもつて現れてきます。その場合に、少し結論を急ぎますが、国家と地域を結ぶ節合点に、その映像を結びあわせているところに、水利という一つの機能があるのだと思います。

これは当然、国家側から言えば、徴税の問題がテーマになりますし、徴税の問題で言えば東洋あるいはアジアの農業という問題になります。農業の問題も、特に水稻栽培というものに焦点をあてると、徴税の問題が現れます。それから地

域社会の問題から言えば、民衆の生産にとつての水です。そうすると国家と社会の結節点になる水利、そして、その機能を管理するいわゆる水利組織、あるいは水利社会、水利共同体といったものを、両者の何らかの媒介的要素として考えざるを得ません。

もちろん、これは時間と地域によって、その関係性というのはいろいろな形のバリエーションとして現れてくることは当然です。言ってみればある地域には水利共同体というものは考えられないという研究もありますが、ある地域にははつきりと考えられるというものもあります。とにかく、その両者の関係というのは常に可変性を持つているということです。その点をどうしてもつと掘り下げて考えざるを得ないのではないかということです。

国家の体制という側面から言えば、中国は非常に巨大な国家で、非常に複雑な官僚機構を持っていますから、行政効率の通減の法則とも言いますか、やることはできる限り下に落としこんでやりま

す。そして行政効率を経済的に運用していこうというところに問題が絡んできます。

そうした専制権力の本質というものが、結局どこにあるのかという問題は、やはり地域と国家を結ぶ水利を通して、ある程度把握することができるのでないかということが、私自身がやってきた研究の一つの考え方です。

そうすると、古くから言われている国家と社会の二元論というような両者の関係は、それほど単純なものではなく、もちろんそこに対抗関係もあれば、相互依存というような関係が非常に多くの形で現れてくるということです。

例えば、国家にとつてみれば国防や反乱といった問題になれば、当然専制権力の支配というのは強化してゆきます。しかし、一方の徴税や治安維持という問題になると、すでに地域に委ねられているということがあります。したがって、相対的に自立性を持った社会集団の中で、本来の政府の機能を代行するようなことが、充分にあり得たというのが実態です

ね。つまり、国家としては、できる限り相対的な権力安定の基盤として、地域を把握したいということになります。そういう意味では、適当ではないかも知れませんが、専制権力というものは実態としては非常に粗放であるというような表現が、可能ではないかと考えています。

馬場 大変おもしろい提起をしています。きました。特に現在はウィットフオーゲルの影響力がなくなりましたが、一方でなぜ専制権力が生じたのかということについて、水の理論以外で考えるにはどうしたらよいのかということで問題提起をしていただきました。

今、森田先生のお話の中にもありますが、ウィットフオーゲルの水の理論に対して、日本でとどめをさしたということとで、藤田先生のお名前が挙がりましたので、ウィットフオーゲルに関連して藤田先生に、水の理論に関する発言をお願いしたいと思います。

藤田 森田先生のご発言は、戦後歴史学の中でウィットフオーゲルの学説の影響と、それから専制国家をどのように考え

るかというお話であつたと思います。私は視点を变えまして、現在から見てウィットフオーゲルの著作がどのようなものであつたのかということを、少しお話ししたいと思います。

今日の座談会のために、もう一度ウィットフオーゲルの著作を読んでみました。戦後の学説で問題になつたのは以前の翻訳版ですが、読み直した書物は、カール・A・ウィットフオーゲル著、湯浅起男訳『オリエンタル・デスポティズム——専制官僚国家の生成と崩壊』（新評論、一九九五年）という新訳本です。



藤田勝久[Fujita Katsuhisa].....

第一章には、「水力社会の自然的背景」というタイトルがついていますが、この中では「東洋的水力国家」とか「水力社会」という表現をしています。これは学説史で言えば、「東洋的専制国家」ですね。その東洋的専制国家の「形成」というのが第一章に当たります。第二章「水力経済」は、東洋的専制国家の「成立」に当たります。第三章以降は、いわば東洋的専制国家の「構造」と「特色」に当たると思います。

そうして見ていきますと、第三章以下の内容が圧倒的に多いんです。例えば第三章の内容には、専制国家がどうやってその構造を維持していくのかということが書いてあります。これは第二章の「成立」の後半部分にも書いてあります。ここでは道路を造る、宮殿を造る、首都を造る、陵墓を造るとか、あるいはその軍事的な力を整備することを指摘しています。また徴税や労役の徴発を行うとか、あるいは郵便の制度などの情報伝達の仕組みを造るといったことです。ところが、よく考えてみると、これは別に水力

国家ではなくても、何か別の要因で統一国家が成立したとします。その国家をどのように維持するのかという際には、その成立の要因はちがっても、同じ現象として現れてきます。そうするとウィットフォーゲルが論証した多くの部分というのは、何か別の理由で成立し得た国家としても、同じように当てはまる「構造」と「特色」だったのです。

それでは、議論の核になる部分は何かというところ、「形成」と「成立」の問題です。第一章の「形成」の部分のみです。と、東洋的専制国家では、その農業灌溉、灌漑農耕という問題が、大量に肉体的労働力を必要とするという前提が書いてあるだけです。どのように耕地を耕作して、どのような労働編成で国家が形成されるのかという事例は書かれていないのです。

続いて第二章の「成立」のところを読むと、その前半部分には、生産的施設として、灌漑用の運河や、水道、貯水池、堤防、堰、防御としての水利施設、それから飲料水のための水道、水運のための

運河などが書いてあります。つまり、ここには確かに水利史研究のテーマになった施設のことを書いてありますが、その前提となる形成から成立の過程は、具体的に説明されていません。それを中国の歴史に照らしあわせてみると、春秋・戦国時代から秦漢時代に専制国家（専制国家と考えてよいかどうかは別の問題ですが）が形成され、あるいは統一国家がどのようにできあがったのかに関しては説明していません。

ですから、ウィットフォーゲルの水の理論が、中国国家を説明する上で非常にわかりやすかったというのは、論理的な形で提示されたものですから、ある意味では批判する立場でも、それを認める立場であっても、議論の対象になりやすかったのではないかと思います。それを認める立場としては、例えば木村正雄先生のように、周代から春秋・戦国、秦漢時代のなかで、具体的にどのように国家が成立するかという過程を説明されたのだと思います。それが有名な第一次農地と、国家によって新しく開発された第二

次農地という形で述べられたわけです。これはウィットフォーゲルの著書と同じように、著作された当時の実証と考証に基づく理論です。

今の時点から見ますと、水利史研究に限らず中国史研究というのは、非常に視野が広がって実証研究も進んでいます。その中で、もう一度、現時点の実証研究をふまえて、ウィットフォーゲルや木村先生の理論を見直していくことが必要ではないかと思えます。私たちは古代史を研究していますから、やはり中心の問題としては、どのように統一国家が形成され、どのように成立したかということを説明する必要があるわけです。

ところが、これが大変難しいのです。これは森田先生が言われましたように、問題となるのは、中国に統一国家が成立するとき、確かに水利が大きな要因になるでしょうが、果たしてそれが全ての要因かどうかということです。統一国家の成立には、他の問題も複合的に組み合わさっていますので、それを水利という特色で強調した点に、やはり無理があっ

たのではないかと思えます。

森田 たしかに水の理論というのはそういう意味では、水利とか治水といった部分だけが突出されています。ですからそれを批判する場合に、木村先生のように一面では否定しておきながら、結局完全に否定しきれないような結論になっているのは、そういうことなのだと思いますね。

藤田 木村先生が水利事業を論証された際に、その一部分は実情に合っている側面があります。それを国家形成の原因にあてはめて説明しようとするときに、無理が生じるのです。そのところをしっかりと受け止めなければいけないと思うんですね。

先ほど私の研究に関してご発言がありました、それは要するに、具体的にある地域で誰かが事業をするとして、それはどのような技術力で、財政はどのように使つて、労働力はどのように調達するかということをシミュレーションした場合、ウィットフォーゲルのような理論的な組織が存在しないというのが、基本的

な考え方なのです。ですから、水利事業の組織の実態に合うかどうかという形で、もう一度、理論を組み直していくことが必要だと思えます。これだけ研究の裾野が広がった現在では、実証研究で相対化していかないと、理論の結果だけが一人歩きする状況が続くと思います。このあたりが難しいところだと思います。

森田 今の藤田先生の発言と同じことの繰り返しになりますが、水の理論という形から、中国の専制権力の発生の論拠が、何か水に特化されていると言いますか、そこがそもそも問題なんだろうと思うんですね。

馬場 今、藤田先生から理論を組み直していくべきだとのご発言がありました。が、松田先生は明清の時代から、何かこの点でご発言はありませんか。例えば国家と地域社会という問題でも結構ですが。

松田 はい。実は明清の研究は森田先生がご専門ですから、森田先生にお話をしてもらう方がいいと思いますが、僕も少しはかじっているという具合ですが、お

話しします。

ウィットフォーゲルの書物も読んでいますが、充分理解できないまま、藤田先生や皆さんのご発言を聞きながら考えていたところでした。その程度でたいした発言をできる能力がありませんので、その点はよろしく願ひしていただきたいと思っています。私が特に感じましたのは、一九八六年でしたか、中国水利史研究会で黄河のシンポジウムをした時であると思います。

その前後から、正史の河渠史を読んでいます、藤田先生は早くから史記の河渠書や漢書の溝洫志を読んでいました。が、伊藤敏雄先生は宋史の河渠史ですが、私は清史稿の河渠史を読んでおりました。それを中心に漢代、宋代、清代で発表しようということでした。そこで感じたのは、ウィットフォーゲルは灌漑の問題に対して、国家が非常に大きく関わっているという説なのですが、黄河では実は治水のほうが大きな問題でした。それで最大の問題点が何であったのかと言いますと、清朝時代の初期から中期ご

るは、国家財政が三千万両であったと言われているが、ある年には一千万両ぐらい治水にかかっていたのです。そういう意味で治水という面では、国家は財政的にかなりの大きな負担を強いられたということを発見しました。

これがウィットフオーゲル流の専制国家理論につながるかは別問題としまして、その後、長江の治水問題についても検討したことがあるのですが、清朝時代には長江にはそんなに大きなお金をかけていないのです。清史稿の長江水利のところを見てみましたが、重要な施設には、ときどき国家がお金を支出するという程度です。そういう意味で、黄河という問題が一つの特徴になります。もう一つは申し遅れましたが、運河ですね。そのあたりにはお金をかけているわけです。従来は灌漑の問題が重視されていましたが、治水という面で、国家との関わりを総合的に整理してみる必要があるなと感じました。

それから、この辺は森田先生のほうが詳しいのですが、宋元明清時代は江南



…………… 松田吉郎 [Matsuda Yoshio]

地域の研究が中心です。そこでの中心は地主とか、形勢戸と呼ばれる人々です。明清になると郷紳です。そうした人々が地域社会のリーダーになって、実質的に水利運営をやっていきます。むしろ国家は次第に衰退していくというのが議論の中心であったと思います。そういうことで江南では地主・郷紳層の力、あるいはその下の佃戸といった存在が、徐々に力を形成していった水利に係わっていくという話になっていると思います。

ところが灌漑の問題で華北を見ると、今日の鈔曉鴻先生のお話でもあったかと

思いますが、やはり灌漑の面からは地域の人々の関わりの方が国家権力よりも強いわけですね。ですから、これからの課題になると、治水と灌漑、そして水運という問題の中で、国家と地域の関わり、そこから専制権力の問題につながっているかどうかということになります。これらのことを説明していかなければならないと思いました。

それから、これは近代の話で恐縮なのですが、私は日本統治時代の台湾を研究していて、いろいろな村を調査しています。例えば、日本統治時代の一九三〇年代に嘉南大圳などのダムができますが、そうしたところは人と水の関わりが非常に強いです。そして台湾総督府がお金を出しますし、地域の人々もお金を出します。ところが、そうしたところというのは、私が見た範囲内では特殊であって、他の地域はもともと異なっています。例えば埤圳では溜池灌漑をやっています。それも重要ですが、例えば農民たちがお金を融通するための産業組合というものができていきます。そういうもののほうが

地域経済にとつては重要な要素です。これは一つの個別的な例ですが、両先生もお話しされていますように、水利も国家権力を考える重要な要素ですが、徴税や治安維持、あるいは地域経済をどのように運営していくのか、そのなかで国家と地域との関係や、水利との比重や関連する問題などを総合的に考える必要があります。

私は台湾で調査している際に、水利はどのようになっていくのかと疑問を抱くことが度々あります。課題の提起だけでなく、総合的に考察した上で、ウィットフォーゲルの理論を再考察したいという考えですね。

森田 今の話ですが、嘉南大圳の場合は、あれは何と言っても日本の植民地時代の話ですから、たしかに極めて特殊な事例でしょうね。一般的には政策的な考えが強いですね。しかも大陸に比べて面積は小さいわけですから、より多面的な収斂性が大きいと思います。

馬場 これまた大変面白い話をしていただきました。国家と地域社会という問題

から、水の管理についてもお話しいたきました。ご発言に関して言いますと、国家と地域社会というところで、水だけで考えるのではなく、いろいろなところから考えるべきだというお話だったと思います。

森田 水利というのは、それだけで考えるというのではなく、一つの要素ないしはその中でも重要な要素と考えていいのではないかと思います。

水利共同体論について

馬場 次に、戦後の水利共同体をどのようにに総括するのかわかることですが、今のお話とも関連してくるかと思います。

森田 そうですね。現在はウィットフォーゲルと水利共同体の問題というのは直接議論の中身としては繋がっていません。しかし、基本的には水利共同体論争が始まったのは、停滞性理論に対する批判からスタートしたという意味では、これは共通したものを持っていると思います。

当時、私などは大学を卒業したばかり

の若い頃でしたが、「世界史の基本法則」なんて言葉がよく言われました。とにかく中国においてもヨーロッパ的な発展に向けて、それを実証していかなければならない、という意識が先行していましたので、そういうところからやはり水利共同体の問題も出てきたということはあると思います。

その証拠に、最初、豊島氏が『歴史学研究』誌上で口火を切った（豊島静英「中国西北部における水利共同体について」『歴史学研究』第二〇一号、一九五六年十一月）わけですけれども、それが例のゲルマン的共同体というもので中国の水利共同体をダイレクトに比定しようとする論理展開で、今から考えるとかなり短絡的な発想だったと思います。すぐさま、江原正昭氏が批判論文を出されました（江原正昭「中国西北部の水利共同体に関する疑点」『歴史学研究』第二三七号、一九六〇年一月）が、結局、随分乱暴な理論であるということでした。それでその後は結局、江原氏の批判を契機として、豊島氏の水利共同体理論に対し

て、いろいろな議論が相次いで出されました。例えば宮坂宏氏の論、前田勝太郎氏の論、好並隆司氏の論、それから私もども若干関係しておりますし、最後は石田浩氏も二つほど論文を書いております。多くの論文が次々と出ていますが、それは批判する人もあれば賛成する人もありました。しかし、そういう後続の論文というのが、ご承知のように一方通行の論文で、完全にその論点を受け止めてそれに反論するというような形の同じ土俵上での反証論文ではありませんでした。ですから、結局、問題点としては相当混乱したわけです。それに対して整理的な論文として出されたのが好並氏の論文です。それから石田氏も肯定的な方向ですが、水利共同体論争を検討整理しております。

しかし、日本では、好並氏や石田氏がその後さらに研究したのは、飽くまで中間的な整理であって、それをさらに発展的に検証していくというような成果は中断したままなんです。それを今後どのように発展的にあるいは系統的に研究の進

展に向けて繋げていくのかということ、今日の、いわゆる水利社会という概念の提示に示されているのではないかと思われます。まあ水利社会の問題は少しあとに置いておきますが。

それで今後この論争を継承して発展していく場合に、その中間的な整理がどういうところかという点、人によっていろいろな整理の仕方があるとは思いますが、簡潔に挙げると、やはり水利権です。水の所有権です。これは論文の中では「鎌戸」として取り上げられている問題です。これが一つのポイントです。

それから二番目は、私としては水利組織の構成、運営、管理といった、その組織の内容です。当然これは農民の階級関係なども関連します。三番目は水利組織と村落の関係です。四番目は水利組織と国家権力との関係です。

絞って言えば、ほかに第二次的な問題や細々した問題もありますけれども、大きく概括的に出ている問題はこういうところ、

それで、結局これをさらに究極的に煮

詰めていきますと、さきほどウィットフォーゲルに関して一言触れましたが、一方の国家権力、いわゆる中国の専制権力の体制です。そして一方の村落ないしは共同体という言葉をつけても結構ですが、村落、地域社会ですね。さきと同じことを繰り返しますが、両者を結びつける中間項としての水の問題が一つの柱であると思います。上から見れば課税・税金、下から見れば当然、農民の生産活動であるということが必須の根幹の問題で、これらを結びつける存在が水利という一つの機能上の構造だと思っています。

従って、その機能を巡って一定の組織が成立して、その組織が権力とどのように繋がるのか、あるいは村落、地域といったいどのようにかかわるのか。この三つの関係、位置づけというものが基本的な問題ではなからうかと思えます。ただ、これも各時代、各地域によって非常に流動的で可変的な、非常に変化している問題です。

これから先は私が勝手に付け加えますが、私などは今堀誠二先生の影響を強く

受けているので、そもそも私の水利史研究は社会的組織論から入りました。そのため水利組織という視点から絡め取るという形になりました。そうすると、水利組織というものは社会構造の最も重要な部分に当たると思うようになりました。その点から言えば、歴史的に見て不変的なものもあるでしょうが、具体的には各時代によって当然大きく変動していくわけですから最近になって、特に地域の大きな問題として捉えているのは、環境です。こういう問題を含めた水利組織、その実証的な研究がこれから非常に重要になっていくと思います。

私は文献研究を専門にして参りましたから、やはり水利組織を捉えるのも、どちらかというところ、やはり環境というところ、ところが、やはり環境ということになりますと、自然との関係変動との関連から静態的な研究では非常に大きな欠陥が生まれます。やはり時代とともに生じてくる環境変化ということから見ると、動態的な研究というものが、これからは不可欠となるだろうと思います

ね。しかし、そういうことで濱川さんが述べたような、専制的な統一国家としての永續性と言いますか、一つの中国史に流れる貫徹したものに対して、どのように応答ないしは新しい形のアプローチをしていくことができるのか、それはこれからの問題であるわけです。

日本の立場あるいは私個人から言えばそういうことなんですが、少し方向を変えまして、先ほど出ていました「水利社会」という一つの捉え方、概念が中国で現れてきております。

そもそも中国の新しい研究動向というのは、先ほど述べた国家の問題、あるいは村落の問題など、水利共同体論争を肯定するか否定するかは別として、日本の水利共同体論争の中から出てきたいろいろな観点や、先ほどあげたいいくつかの事例や、そうした共同体論争に触発されて出てきた論点が、水利社会という一つの概念を生み出したということです。それは決して共同体とイコールではありません。批判的な方もいますし、肯定されている方もいます。

とにかく、新しい概念が出てきました。こうした水利社会という概念が中国から提出されたという動向は、日本だけで言えば、今までの文献を中心とした実証研究をやってきた中では、どうも行き詰まりのようになってきている共同体論争の再検討に対して、最近の中国の諸研究によって大きな刺激になっています。しかも、今日において非常に学問的に自由となった中国社会史の研究から出てきます。特に科学的な社会史研究の中から水利社会という概念が出てきているというところに、私個人としては非常に興味深いものがあります。特に国家との関係、あるいは地域社会との関係というもの、中間項としての水利というものを考える上で、水利社会という社会学的なアプローチに、もちろん共同研究というようなものも可能でしょうが、問題意識として非常に親近感と言いますか、共有していけるように感じています。

今後の研究になりますと、どうしても文献研究だけでは、非常にミクロ的な水利史研究になります。村落と言っても基

層社会という言葉を最近の方々はよく使いますが、基層社会の民間史料というようなものが、社会調査やフィールドワークの中からますます発掘されるようになり、それが非常に水利社会の今後の研究に対して大きな効果を持つてくるのではないかと期待しているわけです。

馬場 少しお聞きしたいことがあります。水利共同体論争の中の焦点の一つであった村落の問題について、鎌の問題も含めて、用水権あるいは水利権に関連しますが、日本の村落と水利の関係についてお伺いしたいと思います。

日本の場合は、村落が同時に水利組織であると思います。そもそもかつての平野義太郎、戒能通孝論争の中でも、戒能先生は日本の村落や理念化したドイツの封建的な村落と対比しつつ中国の村落を比較していたかと思えます。当時の日本の水利組織との比較という点について、どのように捉えられているのかという問題についてお答えいただきたいと思います。

森田 そうですね。私は日本史の研究に



..... 馬場 毅[Baba Takeshi]

ついでには知識が不足しておりますが、村落と水利の関係ということになると、日本の場合にはつきりしていますね。つまり、水利秩序の古典的な形態は、近世的な村落の秩序によって支えられた共同体所有の形態ということです。ところが中国の場合は、村落との関係が一樣ではないわけです。水利組織そのものが地域によってかなり複雑な関係を持つています。完全に村落と水利組織が重なる場合もありますし、両者に齟齬を来している場合もあります。それは水利共同体の議論にも出ていたように、水の権利と土地

の権利が分離しているのか、完全に一致しているのかという問題にも係わりますが、地域によって分離している場合もあるし、密着している場合もあるし、あるいはもともと密着していたものが、近世近代になって分離している場合もあります。

中国の水利史研究でもある程度日本の村落共同体というものをベースに継承しており、ある意味では日本の村落と水利の関係をふまえながら、水利組織という規定を比較検討しているわけで、そこで問題にしている内容というのは、我々が水利共同体を考えていく場合に、注意した論点とほぼ似ているわけです。

例えば水利社会における地域の土地問題、村落との関係、国家権力の介入の仕方、水権をどう取得したか、その範囲をどう取り決めるのか、施設の運営方式はどのようなものかといったことが、水利社会を考える上では個別的なポイントとして大きな問題とされているようです。しかし、結論的には、そういうことを含めた地域と言いますか、集団内部におけ

る自立性と言いますか、公権力との関係といった点で、中国と日本では基本的な前近代、封建制の相違から具体的なあり方としては異なっていると言えそうです。

馬場 今の点について、お二人の先生はいかがでしょうか。

藤田 私は中国古代史の立場ですが、水利共同体という問題は、あまり大きく問題にならなかったと思います。中国古代史では、「国家、豪族、共同体」というキーワードのなかで共同体を議論することというのはありますが、それは水利共同体というような形では捉えませんでした。おそらく古代中国の場合は国家の力が強かったため、国家の視点から考えるというイメージがあつたのだと思います。明清時代では、水利共同体という言葉が巡って地域研究をする設定が求められています。古代史のほうでは、地域社会を理解するために水利共同体という形では議論が展開しませんでした。

森田 むしろ、それだけに、冒頭のウィットフォーゲルの「水の理論」が主

張され易い歴史的状況にあつたということでしょうね。

松田 そうですね。他の問題を含めた共同体というイメージを持ったと思います。ただ、今の若い人は共同体という言葉もあまり使わなくなっていますよね。

森田 古代では水利とは関係なく豪族共同体といった谷川道雄先生の考え方が印象的です。ですから共同体については、早期の論争が出てきた時点では、華北の実態調査が議論の下敷きになっています。戦時中に行われた『農村慣行調査』（中国農村慣行調査慣行會編『中国農村慣行調査』第一巻／第六卷、岩波書店、一九五二年）というものがあつましたが、それよりも以前に冊子になって出版されている調査報告書のようなものがたくさんありました。豊島先生の論文の依拠したものは華北の農村調査のものでありませんが。

馬場 満鉄の内モンゴルの調査ですね。

森田 そうです。包頭あたりの調査です。ですから、圧倒的に清朝、どう遡っても明代中期以降、清代中心に民国にか

けてになります。農村調査になりますと、かなり新しいものですからね。

そうした史料面に関してもそうですね。同じ華北といっても地域ももちろん違います。それらを一様に共同体論争として扱っているものですから、なかなか論点が合わないし、個人の分析視点も違っています。これは当然と言えば当然かもしれません。

馬場 松田先生は何かございますか。

松田 ウィットフォーゲルの専制支配と共同体というのは、別の方面から各々出てきた問題ですがやはり研究者の意識としては関連していたと思います。専制支配に対抗する共同体的な組織というイメージが、研究されている皆さんにあつたような感じがしています。私の勝手な理解かもしれませんが。

華北については共同体に関して非常に云々言われてきて、江南以南では、例えば圩田や畝田でも圩が一つの共同組織とする議論や、あるいは村が共同体であるというような議論が、長く行われてきたと思います。それは森田先生がまとめら

れましたように、水利組織として公権力等の係わりでどう対応するのが問題であるわけですが、水利組織の中の機能で、特に治水・灌漑・排水・浚渫・堤防の築造といったところに共同的な組織があつたかどうかということで議論されてきたと思います。

その点について、私の印象はどうも文献だけでは非常に抽象的で、あるといえはある、という議論になつていて、またあるいはそれはそんなに重要視できるようなものではない、という議論もあつたと思います。その辺りが森田先生のおっしゃるように、近年の調査で碑文とか水冊とか、あるいは聞き取り調査を見て検討していかなければなりません。

私事で恐縮ですが、寧波の水利調査を行つていまして、最初は水利共同体があるかどうかという点に関心がありましたので、村人にいろいろ聞いてきました。そうすると一様に共同体は無いと言ふんです。例えば、治水の時に村で共同でやることがありましたかと聞くと、あることはあつたが、それは臨時的だとい

います。浚渫を共同でやることはありますかと聞くと、あることはあつたがそれも臨時的で、常にやらなければいけないという規定もなければ規約も何にもないと言います。それが寧波で私が調査している結果です。水利に関わる組織は臨時的ではあるけれども、あると言えはあるんです。ただ、恒常的に強い結束力を持つていたかと言うと、村人の話ではそういう証言はありません。

こうしたことから結局、水利組織の内容について理論的な整理をしていかなければならないと思います。イメージとして、恒常的に、常に浚渫なり灌漑なりを共同でやつたということを共同体として捉えるのか、あるいは緩やかな利害に基づいて行う浚渫や灌漑を共同体と考えるのか、この辺の整理をこれから行つていく必要があると考えました。

もう一つは、やはり国家単位が扱う水利施設です。黄河あるいは運河です。それから省単位にまたがっている河川を管理する組織、県で管理する組織、村で管理するところですか。どこが管轄する組織

かということ、そこで人々の係わり方もいくつかの形態が出てくると思います。その辺を整理していかなければならないというように課題を感じています。

森田 その辺がやはり地域や環境に関する問題ですね。とにかく中国の場合は地域のパリエーションが非常に富んでいます。当然、それは自然や気候の問題など、いろいろな要素が加わってきます。

水の供給がどういう形で行われるかによつて、水利組織の在り方は緊密化したか緩慢な組織となつたり、それは非常に千差万別であるでしょう。確実なことは言えませんが、それが中国の実態なのであろうと感じますね。

地域差の問題

馬場 地域差の問題ですね。今、松田先生からも水利組織の内容が、いわゆる共同体的な規制を持っていたのか、あるいは緩やかな共同組織であつたのかといった指摘がありました。必ずしも水利共同体論争をふまえるというわけではありませんが、その点に限らず、さきほどの

地域の問題と関係して、国家側の水利組織と、そうではなくて民間側の水利組織も欠かせないというお話などをふまえた上で、地域の問題を考えるとどうでしょうか。

それぞれの時代ごとに考えるとどのようなことが言えるでしょうか。藤田先生からご発言をお願いできませんか。

藤田 中国の地域における農業と水利の関連で言いますと、中国には南船北馬という言葉があるように、古代では華北と、江淮・江南という区別があります。一般に指摘されていますのは、華北は畑作農業で河川灌漑、江南は稲作農業で溜池灌漑ということです。それと作物は、時代と地域によって変わりますが、やはり基本的な形が中国史には続いているということです。

では古代から近現代にかけて、何が変わ化してくるのかというと、農業技術の点では、例えば天水灌漑や井戸灌漑の状況から、河川灌漑や溜池灌漑が増えていくことにあります。しかし問題となるのは、個人の力が及ばない範囲のところま

で灌漑を行うときに、一定の地域、あるいはもう少し小さい範囲で、どのように公共的な灌漑施設を建造するのかということだと思っています。

地域差の問題には、二つの方向があると思います。一つは、本当に華北は河川灌漑で、江南は稲作と溜池灌漑という地域差でよいのかどうかという問題です。この点について、例えば黄河流域の場合には、古い時代に黄河のすぐ側には住めませんでした。最初は、黄河支流の渭水や、洛水の側に住んでいます。むしろ黄河の問題は、漢代では治水や水運と関係しており、一部に河川灌漑が出てきます。ですから華北の水利では、河川灌漑に全てが代表されるわけではないということです。それから江淮と江南の溜池は、佐藤武敏先生の研究（『古代における江淮地方の水利開発』『人文研究』一三巻七号、一九六二年、「漢代江南の水利開発」『三上次男博士喜寿記念論文集』歴史編、一九八五年など）がありますが、当初は軍事的や、洪水防止、あるいは養魚などの用途があります。そう

いう用途がありながら、のちに灌漑に使われていく要素がありますので、やはり華北と江南ともに、その時代、その地域の要素を見なければいけません。

もう一つは、大規模な事業をどのように組織するかということです。これは先ほどから指摘されているように、ウィットフォードの専制国家論や、共同体の論争とも関係します。これについては、漢代の事例を調べたことがあります。それは華北や江南で大規模な水利事業が行われる際に、どの地域と組織で行われるかということです。大きな水利事業は、やはり首都の周辺とか、地方の中核都市の周辺で行われる場合が多いのです。そうでない範囲で、例えば各地にある村のようなどころでは、比較的小さい規模の事業として、村や個人の単位で作られます。ですから、もし華北が河川灌漑で、江南が溜池灌漑であるというのであれば、その生産体系や、北と南の違いによって水利事業は変化するはずですが、ところが、北のほうで公共事業のような大規模な事業が出てくると、南のほうで

大規模な事業がみえるのは、ほぼ同時期に現れてきます。つまり大体、時代的な傾向が一緒なんです。

ですから、北と南の農業と灌漑や、地域性を考える場合には、一つは農業灌漑がもつ社会的な意義と、もう一つは、政治組織や経済状況の変遷を知る必要があると思います。その両者が、古代と次の時代にどう変わっていくのかをみれば、地域性の側面がわかると思っています。農業技術の問題は、それぞれ専門の方がいらつしやいますし、詳しい研究がありますが、私は地域差について、そのように考えています。

森田 古代の場合は、特に黄河を中心とした流域文化というものが国家を支えていたでしょうから、特に治水を巡っては国家的な作業が不可欠になるでしょう。華中から華南では、長江があるとはいえ、長江の治水というのは、黄河ほど大規模な国家事業としては見られませんか。

ですから、やはり華中華南において、国家的な事業としての水利を捉えようとした場合、松田先生、例えば近世以降に

なるとどのような事情があるのでしょうか。

松田 はい。運河の修築が一つあります。あとは、広東の桑園囲基の例のように、地域的に重要なものは国家が財政的援助をしますが、あとは地方の県とか人士、郷紳層が運営するというのが、おおむね近世の特徴ではないかと思っています。

藤田 私が言っている大規模な水利事業というのは、地方行政の中核的存在となるようなところでは公共事業ですが、すべての地域に及ぶわけではありません。いわゆる地方政府が行う事業は、やはりそこに利害のある城郭都市や、その近くにある地域の開発を中心にするという傾向があります。

森田 私は以下のように考えています。お上というのは仮に県とします。地方、村落あるいは地域の場合は、県ならば県レベルのお上が出てきましていろいろやるわけですが、県の地方官の関与というもの、実際に基底村落であれ、その村の人々の間にどの程度の関与があるのか、その関与の時と場合、中身が問題な

んですよ。文献を読んでいますと、その関与というものは官僚的指導が非常に徹底していたかのように読むことができます。果たしてそれは、国家権力が地方をおおいかぶせるまでの、その権力の浸透が地域に認められるのかどうかということになると、本当の意味での実態は微妙になりますよね。一般的には官の名において行われていても、住民の公議を得たもので、その公議性と權威性に仮託しているに過ぎないのです。

藤田 中国古代の場合は、国家が人々に関与するとは捉えられないケースがあります。水利事業は、場所的に限定されています。重点的な開発は、地方官府がある地域か、あるいは有力者たちの利害のあるところが優先されるといった傾向が見られます。地方の水利事業では、その水系から離れた末端の方まですべてが行き届くわけではありません。ですから、すべての水系で地方政府の水利事業は行われていません。民間で行われる水利事業は、いかにも国家の水利事業を通じて末端の社会まで行き届くような感じでは

けれども、実はどうもそうではないように思います。

森田 やはりその場合に、重要になるのは地方エリートの存在です。明清で言えば郷紳と言われるような、必ずしも官僚ではない存在です。その力は確かに大きいですね。

藤田 古代で言えば豪族という存在ですね。歴史書の記事には、官僚になる人や豪族にあたる社会層の事業や、不正の事例などが出てきます。

森田 それはある意味では、彼らの立場というのは官とつうなんでしょうね。だからその辺がどう動くかによって官が動いたものと等しくなる。場合によっては官の作業だ、ということにもなってくるわけです。

馬場 松田先生いかがですか。

松田 はい。その点は同感です。ただ、馬場先生が指摘されました華北と華中華の違いについて、藤田先生のほうからは、華北は畑作・河川灌漑、江南は稲作・溜池灌漑であるというご指摘で、基本的にはそういう形であろうと思います。

す。

それ以外に、華北の場合は、河川灌漑に加えて井戸水灌漑という要素がかなり重要ですし、南部は溜池があります。河川、都市部は飲料水用として井戸を使うわけです。

たしかに畑作、稲作の違いはありますが、山西大学の行龍先生は、華北は概ね欠水であり、水不足で人と水との結びつきが親密である。南の方は豊水で人と水の結びつきが緩やかであるということを目指されています。このように単純には分けられないと思いますが、例えば森田先生が研究されました山西省の四社五村の例は、水は灌漑に使わない不灌漑で、飲料水のみに利用するだけだといわれます。そこには規約もあって、水の配分も厳密に決められている。私が研究している寧波地域は、規約らしきものは全く残っておらず、自由に取水をしている。ある意味では豊水、欠水という違いが、考えねばならない一つのテーマであると思います。

それだけではなくて、今日も鈔曉鴻先

生のお話がありましたが、アルカリ性の土壌を抱える地域での灌漑利用の問題であるとか、それから水が斜面からかなりの勢いで流れていくようなところで引水する場合とか、緩やかに水が停滞しているような箇所で引水する場合の問題であるとか、そうした地理的条件に関する問題の考察が必要です。そして気候条件を考えながら、水の利用と農業において、問題となっている水利共同体的なものかどうかなもの、今後考えていかなければならないと考えています。

森田 一つの例になるかどうか分かりませんが、私は今、福建省の比較的海沿いの地域のある水利組織を調べています。その福建のある場所というのは、莆田県といい、山が海に迫っていて自然の良好な平地がありません。したがって、そこで田んぼを切り開いていくと、溪流の水が直接海に落ちてくる。そしてそこで海の水と混流してしまします。一方では海の塩水が陸にまで遡上してくるわけです。そこで、その水利組織の場合は、ま

ず海の水をシャットアウトします。そして海水を遮断して、塩水に浸っている土地を改造して、山の水をその地域へ持つてくる。そういう方法で水利組織を造っているという例が一つあります。その場合、地域の大量の労働力を動員して行っているんですが、しかし、それも政府の力というよりは、やはり地域のエリート層が主体となりながら、それに地方官僚の協力というものが、はつきりと見えてきます。だから地域や環境、その施設の主体性の在り方によって、その組織の性格というものがどのような形をとるのかは、非常に異なってくるのではないでしようか。

地域のエリート層、地方官僚、 国家の水利における役割

馬場 先ほど国家と地域社会ということでご発言がありました。郷紳層やエリート層に関するお話もありました。水利の機能を担っているのが地方官僚というお話もありました。今、先生方がご発言なされた、エリート層なり郷紳層なりそう

いう層がいったいどのような役割を果たしているか、またそれらの時代的な変遷の問題についてはどのようにお考えでしようか。

森田 よく指摘されることですが、水利組織から見た場合の公権力の在り方についてですね。例えば、組織の中で水利紛争などが発生しますと、その組織の中に調整役が引き込まれます。しかし、そうした状況が無い場合は、自立的に組織としてやっているというような形です。原則として共同体というのは自立的に解決するのが建前ですけれども、非常に安定していると思うような組織であっても、常にうまくいくとは必ずしも限らないわけですね。そうすると内部的にいろいろな分裂が起つてきます。その時にはやはり公権力の介入を待たなければなりません。それで、その内部的に公権力の必要性が待たれる時というのが、やはりどのような時であるかということです。これが、先ほども私も言いましたが、水利組織というのは静態的なものではなく、常に自然環境のような問題と絡まって、共

同体自身の中に矛盾が起ってくるわけです。最近の研究から一例を紹介すると、あれは銭杭氏の論文だったかと思いますが、この典型的な研究事例が報告されています。

浙江蕭山県の湘湖の場合ですが、当初は造成に関わった九郷の人々による水利集団であったわけですね。しかし、その自主的な農業水利としての共同体的物資に對し、歴史的、環境上の変化によって、その求心力が脅かされるようになっていくわけです。一部の豪強地主による用水の独占や盗水のほか、灌漑用水の相対的低下が、周辺住民の生産活動の多様化による湖水との親疎関係の乖離をもたらし、在来の水利集団に對し、分裂の危機を与えるようになるわけです。

さらに具体的にいえば、客民のような連中が、農村の中に増えていくわけです。そして、その湖から最初は農業水利にのみ使っていたけれども、そこで魚を飼うやつも居れば、池の中から泥を攫ってそれで焼き物を造るとか、本来造られた共同体以外の利益に繋がる連中が、

続々と増えてくるわけです。こうなる
と、その水利共同体はもはや完全に崩壊
して調整が取れなくなるといふわけ
です。こうなると財政上公権力はどの民衆
の利益を優先するか、といった観点から
関与が表面化してくるわけです。

馬場 それは、例えば明末清初がどうい
う変化であったのか、時代を画するとい
う意味ではどうでしょうか。

森田 共同体あるいは村落の存在が、次
第に強まってくるとか弱まってくると
いった意味でしょうか。一般論としての
私の理解では、官の支配の相対化でしょ
うか。相対化といっても具体的にどうか
ということは定かではありません。村落
らしきものが、完全にその水利組織の下
部に埋没しているような状況というのは、
宋元あたりでは表に現れてきません。
むしろ明の中期ごろ以降、村落共同
体の中にある村落個々の存在とその中で
の郷紳の役割というものが浮かび上がっ
てくるという印象を私は持っています。
馬場 それでは官が介入してくる可能性
が高くなるということですか。

村落共同体内部の矛盾というのが非常
にはつきりと顕在化していくなかで、そ
の水利共同体もその下の村落との係わり
が強いものですから、村落内部で問題を
解決できなくなると公権力が介入してく
る機会が多くなるということですか。

森田 いえ、むしろその村の存在が浮か
び上がってきますと、例えば水利工事を
する、経営したり管理をしたりします。

その場合に、やはり村単位に労働力を分
担するとか、あるいは経費を分担すると
か、そういうことで村がクローズアップ
されてくれば、非常に容易に行われるわ
けです。ところが、それがあまりはつき
りしない場合には、郷紳が金を出した
り、あるいは官がいくらかの援助をし
たりという形態がむしろ見られます。特に
宋代の頃には、私はそういう形が多いよ
うに思います。村の存在が浮かび上がっ
てくるのが、むしろ先ほど言った明の中
期以降ですね。だから村落共同体の中
における、村の位置づけというものが次第
に大きくなるというような感じを受けて
います。

藤田 一つよろしいですか。話が少し違
うかもしれませんが、漢代から『三国
志』の蜀のことです。四川盆地の都江堰
は、代表的な水利施設です。ところが、
この都江堰というのは、ちょうど成都が
ある扇状地の上流に造られていて、洪水
防止と農業灌漑や、一部は水運にも利用
したといわれています。ただ、その労役
に四川の人を全部使ったとしても、灌漑
によって利益が及ぶ範囲というのは、成
都の周辺にあるごく一部の地域です。そ
うすると三国時代の蜀は、都江堰の利益
だけではなく、ほかの地方にも生産基盤
を持っていることになります。それで
は、成都から離れた周りほどのように暮
らしているのかというと、そこに豪族の
存在がみえています。四川盆地に行っ
てみますと、そこには領主として広く平地
を持っているという形態は無いんです
ね。さらに見ると、個人で所有している
ような溜池と農地が点在しています。そ
のように点在した土地を集めて、どこか
の豪族の所有になっっているんです。そ
ういふ地方では、漢代の墓のなかに、陶器

で造った池の模型などを入れています。

この地方では、国家の水利網に組み込まれない形で、小さな溜池の水利が近現代まで続いているんですね。

ですから、蜀の国では、一方で都江堰のように中心地にあるような水利事業と、そこから離れた溜池と農耕地を累積しているような形が混在しているんです。これは時代的な展開というよりは、地理的な差によるものです。先ほど私が、中心となる官府の周辺や、あるいは利害のある土地に大規模な事業が興ざれると言ったのは、三国時代の蜀の場合も典型的な例だと思います。そうした要素があるところには、一定の国家権力がなかなか及ばず、習俗やその生産もあとの時代までかなり残る。仮に国家の大規模事業があつたとしても、末端のところまで介入して、生産に関与しているかどうかは、また別の問題だと思うんです。

現在、少数民族の多いところに行くと、未だに少数民族の習俗と生活が残っています。この地方では、いろんな国が歴代に変わって、民は税を取られ、国家

がそこに介入しているはずなんです。生活形態は変わっていないのです。もし国家が、生産や習俗まで介入していたら、少数民族や地元的生活もすべて変わっているはずなんです。変わっていないのです。ですから、そうした地域には生活や習俗が残るという要素も、一方ではあると思います。

森田 先ほどの話に関連しますが、宋代でも例えば王安石の新法政策ですね。この時には非常に積極的に農政を強化します。そうすると水利組織が、例えば破壊とか何かで壊れるとすると、そういう費用は常平倉から手当するように、官の水利組織に対する政策的な強化というのは非常に強まってきます。しかし宋代以降になると、時代によっては一概に言えませんが、総体的に官僚組織を見たとしても、水利の専門家のようなものを行政上特別に置くようなことをしません。農業灌漑の場合は特にそのようで、あつたとしても形式的なものです。

明清時代、特に清朝では特に水利の専門官というのは存在せず、一般的な地方

官が兼務するのが通例ではないでしょうか。松田先生どうですか。

松田 黄河のみあると思います。あと、長江は国家が重点的な箇所・地域に介入しまして、堤防の修築など必要所を押さえています。それと運河の管理ですね。おおむね明清時代の国家的な関与は大きく言ってその三つだと思っています。

私の研究している寧波の例では、東晋ごろから県の形態が本格的に現れてきます。そこで特に問題となるのは、現在の寧波地域です。三江口という水が合流するところを港として開発しようというところが、この地域の最も中心的な問題になります。それで西の方では広徳湖の水、東の方では東銭湖の水が確実に流れるようにしようとしています。

主に農業用水、飲料水が中心になりますが、它山堰などの水利施設を造る。これらの水利施設には県が関与します。広徳湖や東銭湖を廃湖あるいは守湖にするという論争が行われたり、它山堰に異常が出た場合に修理するといったことが行われます。河川・湖の要所には堰という

水門があるのですが、これは県が任命した、おそらく地域の村長から指名した硯夫という管理人が水位の管理を行います。

它山堰が壊れた場合というのは、明清時代以前の史料には残っていませんが、時々県がお金を出したのでしょうが、地域に任せるとい感じです。郷紳が出てくる場合もありますが、付近の村人だけでよい場合はそうするという例もあります。つまり、どこが造って誰が管理しているかによって、介入が大きく関わってきます。

それから村人同士の争いに、まず国家は関わりません。通常は族長同士の話し合いで、その次に村長が出てくる。その村を超える水争いになりますと、県が出てくるということです。だいたい基本形態がそのようなものではないかと思えます。

社会調査および 最近の注目すべき研究

馬場 わかりました。ここで、先ほど文

献研究は静態的なため、やはり社会調査が必要であるというお話があったかと思いますが、水利史研究を行う上で、社会調査を行うと見えてくるものと言いますか、そういう観点からまず松田先生にお話をお願いします。

それから、森田先生にも四社五村のお話を簡単にさせていただいて、最近の注目すべき研究に関しても松田先生にご発言をお願いしたいと思います。

松田 はい。『中国—社会と文化』第二六号（二〇一一年七月）にも書かせてもらったのですが、フランス高等社会科学院、北京師範大学、フランス極東学院による山西陝西地区の水利調査が画期的だと思います。従来の史料では見られないような碑文史料とか、聞き取り調査とか、そういう内容が非常に盛り込まれていまして、それを元にして、森田先生が『山陝の民衆と水の暮らし——その歴史と民俗』（汲古書院、二〇〇九年）という本も著されています。今まで抽象的しかわからなかった、見えなかったことが、水の管理や利用などについて具体的

に見えるようになりました。これが一番大きなことだと思います。

私の場合は華北ではなく寧波の調査をしたものですから、こういうものが出てくると思っていたら、全く出てきませんでした。水利共同体的なものがあるかとインタビュースすると、全然出てきませんでした。ですから、生の民衆の声を拾い集めていくという感じで、今まで抽象的に持っていた概念が打ち壊されていったということです。

例えば、古典的な理解ですが、地主小作人制度というのが、寧波でも存在すると理解していましたが、それは非常に少ない。地主と長工関係というのが基本的な形態になります。その地主と長工の間には非常に大きな差があつて、かなり強力な支配関係があると、勝手な理解をしていたのですが、「三度の食事で一緒に同じようなものを食べた」ということを聞いてからは、大きくイメージが変わりました。それはその地域における農業水利形態のことが、具体的にわかってきたということです。ですから、水利の浚

渫、灌漑、築堤といった大きなことは、
県がやったりとか、郷紳や商人がお金を
出して労働力を徴発して実施したとい
うことは、文献として出てきます。これは
民国時期の特徴なのかもしれません、
本当にこのような形態は希です。民衆た
ちが自ら取水し、水田に灌漑し、規約も
設けません。具体的な水利状況が判明し
てきましたので、今後これを文献資料と
関連させながら位置づけていく必要があ
ると感じています。

注目すべき研究というのは、先ほど申
しましたフランスの研究がありますが、
もう一つは鈔曉鴻先生の研究などをどの
ように採り入れていくのかということ、
即ち環境問題ということも考えていく必
要があると思います。

我々は文献研究、人文学で聞き取り調
査をしますが、それには限界があるとい
うことです。ですから自然環境、地理環
境、水環境といった理系的な視点をもつ
て、共同で研究していく必要があると思
います。その点、鈔曉鴻先生の研究とい
うのは、実は日本でも原宗子先生の研究

を通じて行われているのですが、こうい
う問題を我々は考えていかなければなら
ないと思います。

それから、もう一つは、従来から中国
水利水電科学研究院が行っていますし、
日本では土木学会も関係しているのだ
が、ただ水利史を研究するのではなく
て、現実の水利について望ましき方向と
いうものを提言しています。我々はそう
した提言ができなくても、水利水電科学
院が出しているような成果に対して、こ
れがどうなったのか、その時の提言がど
う活きたのか、例えば政府はこの時ダム
を建設しようとしていたけども、反対し
たとか、ダムを建設した結果、どのよう
になったであるとか、その効果が如何な
るものであったのかを見る必要があると
思うんですね。

それは歴史研究でも、例えば先ほどお
話ししました広徳湖の例では、水が無く
なって湖田化して、廃湖すべきだと主張
する意見と守湖すべきだとする意見があ
るわけですが、その後の効果をいろいろ
な文献で見えていく。そしてそれが現代に

もどう関わっていくのかを検証する。

というのは、ダム建設の例にもあるこ
とですが、古代の水利施設が現代でも有
効に利用できるのかどうか、古代の施設
とどう併存させていくか、そうした通史
的な観点をもつて見ていく必要があるの
ではないかということ、現代研究にお
いて感じました。

馬場 今、原宗子先生のお話が出ました
が、日本の研究では他に何かありません
か。

松田 はい。原宗子先生のご研究をはじ
め、環境史が非常にクローズアップされ
てきています。その点、私は原先生のも
のしか十分に読んでいないのですが、上
田信先生の研究もあります。原先生は水
利史も研究されていますが、日本の環境
史研究とも我々は連携を行って、採り入
れるべき点は採り入れなければならない
と思います。

馬場 森田先生、フランスと中国の共同
研究についてはどのようにお考えでしょ
うか。

森田 今、松田先生がおっしゃったこと

と重なりますが、中国で行われた研究としては、今のところ最先端の研究だと思います。

まず一つは、歴史学者だけで調査をしたわけではないことですね。歴史学は当然のことですが、地理学、考古学、水文学、金石学といった視点で、非常に多方面にわたる研究者による共同研究です。それからもう一つとして、水資源と社会意識というテーマを狙った調査なんです。ですから、まさに水利というものが地域の人々にとってどのような形で利用されていたのか、水資源の利用の仕方、あるいは用水関連としての用水分配、用水の集団利用、村落の水利組織等々、基層社会あるいは基層村落の水のあり方を、集中的かつ重点的に調査の対象にしています。

結局、我々は地誌などの水利史料や文献をよりどころにします。地誌などはいたい地方官僚なり地方エリートの手によって成されるものです。そうした形で捉えられた水利組織というものと比べ、今新しく新地誌、地方志というもの

が編纂されています。彼らの問題の対象としては、今日の鈔曉鴻先生のお話にもありました、実は新地方志にも漏れている史料を拾っているわけですね。それは完全に民間所蔵の水利関連史料であつて、新地方志にも注目されなかったような民間史料に、基層社会の民衆の水の利用の仕方というのが、非常に微細な点にわたって明らかにされているということです。彼らの言葉で言えば、「非政府的な地方民間の記録である」という言い方をしていますね。

ですから、そうした記録というのは、基層社会の水資源の利用と管理に関するものですが、それが官僚の目にも触れないということです。特に、四社五村の場合では、ちょうど県と県の交界地域にあります。そうすると、政治権力の相対的な空白地となつていて、結局、三県にまたがっています。そういうところで、そういうものが見落とされている。そうした例に、集中的に目を向けているところがある面白いですね。その点で画期的な史料として、いろいろな角度で大いに

利用する価値があると思いますね。

馬場 藤田先生、最近注目すべき研究についてご意見をお聞かせください。

藤田 はい。非常に大ざっぱな話になりますが、一つは技術史の研究です。特に中国では、技術史の研究が進んでいます。また先ほどもお話がありました、フィールドワークによる成果が充実してきているところが、新たに注目すべき研究だと思います。水利事業が社会にどのような影響を与えたかというのは、結局、自然環境や社会背景をできるだけ理解して、はじめて正確に捉えることができると思います。これらの要因を無視して議論すれば、たとえそれが理論的であつたとしても、実情に適用される理論としては潰れてしまうわけです。ですから、理論の基になる研究として、技術史の分野やフィールドワークの成果が積み重なって実情がはつきりしてくるならば、その範囲のなかで共通の議論ができます。そうした点が、新しい傾向ではないでしょうか。

馬場 それは、中国で、ということ

しょうか。

藤田 それは中国の研究と日本の研究と両方に言えることです。ただ技術史の研究は、中国のほうが進んでいます。日本の研究では、社会史の研究やフィールド調査の研究が進んでいます。もう一つは、先ほども松田先生からお話がありましたが、やはり水利史研究の現代的意義という問題です。私も歴史を研究していますが、過去の歴史を明らかにするということだけではなく、また中国社会と日本の社会も含めて、水利史研究にどのような現代的意義があるのかということ、やはり考えなくてはいけないと思います。それには様々な方向からのアプローチがあると思いますが、これからは意識しておかなくてはいけないと思います。

森田 特に、今グローバルな形での地球環境の異常化ということが言われている、それは中国でもいろいろ現実には洪水や旱魃の被害が言われているわけです。我々はむしろ農業としての水利灌漑というものをメインにしていますが、相対的

にそうした異常気象による環境変化に対する水利や治水といった分野での対応が、非常に強くなってきたというところが言えるのではないのでしょうか。

藤田 もう一つ付け加えていただきます。今までは、水利に代表される成功の例を学んできたと思うんですね。しかし、失敗の例を学ぶということも、水利史研究の一つの重要な要素ではないかと思っています。これまでは社会における開発や、水利事業の成功の例が中心の課題でしたけれども、中国の歴史にはたくさん失敗の例もあります。そこから知恵を学ぶということも、水利史研究の一つの方向ではないかと思っています。

森田 先般、譚徐明先生から手紙がきているんですが、大運河を世界歴史遺産に登録しようとしているようです。その運動のために、中国水利水電科学研究院の水利史研究所が主体になって登録のための歴史資料を提供するという仕事に、今追われているということをおっしゃっていました。これなども、まさに当面している一つの水利史研究でしょうね。

馬場 予定した時間がきてしまいました。今日は私どもの座談会のために先生方にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。これで座談会を終えさせていただきます。

(二〇二一年一〇月三〇日)
(テープ起こし 野口武)